

地域を活かした美術展覧会によって育成される伝え合う力の研究

A8G31007 鈴木 眞里子

指導教員 中本 敬子

1. 問題と目的

美術作品を作り、展示する過程において、「作品を通して何を伝えるのか」ということの重要性が高まってきている。このことは、学校における美術教育でも同様である。平成20年小学校学習指導要領図画工作編で、美術館以外にも暮らしの中の作品などを展示する地域の施設や場所の必要性が論じられている。例えば、作品展示に関して「児童の作品を通して学校と保護者や地域の連携を深める効果」や「地域の公共的な施設などに児童の作品を展示したり、そこで作品の説明をしたりすることで、児童の造形活動の素晴らしさを広く伝えること」と示され、学校や美術館を超えた地域に児童の作品を展示し、広く伝えるという視点が加えられている。また、八田（2007）によると、『展覧会』は、人々と芸術の出会いの場であり、芸術が個々人との親密なつながりを深めるとともに、社会の中での自らの存在を強くアピールする場である」と指摘している。しかし、実際に地域と繋がる展覧会とはどのようなものなのか、また、どのような実践を行えばそれが実現できるのかについては、未だ十分に検討されておらず、結果として各学校に地域との連携の仕方に差がある状態だと言える。

以上を踏まえ、本研究では地域と繋がる美術活動の実践を分析していく。また、地域の方と交流しながら行う作品制作の授業を実際に行い、児童の成長にどのように影響するか検討していきたい。

2. 方法と結果

研究1 埼玉県越谷市 まちアートプロジェクト「街を美術館にしよう」の実践分析

(1) 方法

調査対象：埼玉県越谷市まちアートプロジェクト「街を美術館にしよう」展覧会に参加している作品制作者5名

調査内容：2006年から始まったまちアートプロジェクトは、文教大学生を中心とした埼玉県越谷市の商店に、店主とのコミュニケーションを大切にしながら作品を制作・展示する市全体を「美術館に見立てる」活動である。作品出展者に対し、全12項目のインタビュー調査を行い、特徴的な発言に関して、地域や作品・自己に対しての意識変化が示されているか検討した。インタビューは1人につき全4回実施し、1回目は展示店舗決

定前、2回目は展示店舗が決定し、作品制作を始めた頃、3回目は作品展示終了直後、4回目は作品展示が終了して約1～2ヶ月後に行なわれた。

(2) 結果

第1回目インタビューと第2回目インタビューの比較において、5人すべてに作品を通しての自己意識の高まりがみられた。ここで言う作品を通しての自己意識の高まりとは自分の作品を通して、自分を理解してもらいたいという意識である。第1回目インタビューと第2回目インタビューにおいて、持続して自己表現欲求を持ち続けている様子がみられた。さらに、展示場所提供者に対して作品を認めてもらいたいという承認志向が伺える。ただ展示場所提供者が作品を気に入れば良いというわけではなく、作品出展者・展示場所提供者・鑑賞者の三項関係の意識が高まっている。全体的にインタビューの発話時間も回数を重ねるごとに増加する傾向があった。

研究2 絵画造形教室 学美塾の授業実践

(1) 方法

対象児童：絵画造形教室学美塾に通う小学校2年生から5年生まで6名の児童

実践日：2009.7.11(土)・7.18(土)・8.8(土)・8.29(土)・9.5(土)・9.26(土)・10.10(土)

全7回・2時間授業（欠席者に対して、8.11(火)・8.18(火)・9.16(水)補講を行う）

実践内容：越谷市商店に店主とコミュニケーションをとりながら作品を作り、展示する「まちを美術館にしよう」の授業実践

実践目的：地域の方と交流しながら作品を制作する授業を考え、実践することにより、児童に与える影響について調べ、地域を活かした美術展覧会によって伝え合う力を育成する。

3. 今後の課題

研究1では、各人のインタビュー結果から共通事項をあげ、詳細に検討する。さらに、地域に作品を展示する場合にどのような活動の要素が今回の結果に影響したのか検討していく。そして、研究2での授業結果を基に、児童が行う地域を活かした美術展覧会の授業を行う際の留意点を整理していく。

4. 参考文献

文部科学省「小学校学習指導要領解説 図画工作編」, 2008年8月

文部科学省中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する(答申)」, 2005年

八田典子「芸術受容の『場』の変容—『大地の芸術祭』にみる『展覧会』の新しいかたち—」, 2007年, 島根県立大学「総合政策論叢」, p.123-146